

第5回「静止衛星データ利用技術懇談会」の議事概要

1. 懇談会の概要

日 時:平成 23 年 10 月 20 日(木)15:00~17:00

場 所:気象庁東京管区気象台第一会議室(8階)

出席者:中島座長、高藪、中北、中島、中村、森山委員

瀬上観測部長、赤枝計画課長、定村気象衛星課長、
牧原総務部参事官、里田技術開発調整官(企画課長代理)、
小林気象研究所気象衛星・観測システム研究部長、
角村気象衛星センターデータ処理部長

2. 懇談の概要

(1) 懇談項目と主なポイント

以下の懇談項目に沿って、事務局から資料の説明後、懇談が行われた。

- 1) 国内の調査・研究の推進についての助言
- 2) 気象庁における次期衛星に向けてのプロダクト開発状況
- 3) 第2回アジア・オセアニア気象衛星利用者会議に向けての準備状況
- 4) その他

主なポイントは次のとおり。

- ・ 防災関係の研究者に衛星のデータやプロダクトについて積極的に宣伝する。
- ・ 次期衛星から作成可能な植生等の陸面に関するプロダクトについては、次回の懇談会までに事務局で整理し、現状を説明する。

(2) 主な意見交換の内容

<「気象研究コンソーシアム」による気象衛星観測データを用いた調査・研究の推進>

事務局説明:平成 22 年度より「気象研究コンソーシアム」の枠組みで静止気象衛星による「ラピッド・スキャン観測データ」を用いた研究が公募されており、現在、5つの課題が実施されている。平成 23 年度は待機運用中の「ひまわり6号」を利用して6月1日から9月30日までの昼間に「ラピッド・スキャン」観測を実施した。来年度以降も夏季・昼間に観測を継続する予定で、「ラピッド・スキャン」観測データを用いた調査・研究の促進のため、気象学会等を通じて周知を図る等、コミュニティーの拡大に努めたい。

委員: 課題が増えていくことは非常に喜ばしいことである。気象学会以外の場でも課題について宣伝し、周知を徹底することが重要。

委員: 「ラピッド・スキャン」観測の機能を使用して新しい研究を行う宣伝活動は気象庁として可能なのか、コミュニティーから行っていいのか。

気象庁: 研究として行うのであれば積極的に行っていただいて構わない。

<2011 年春季気象学会専門分科会「ひまわり8号・9号が拓く新しい気象学」>

事務局説明: 専門分科会の総合討論においては、容量が増大する次期衛星の観測データの共有、配信の課題への関心が高く、「次期衛星データは質量ともにこれまでに比べて格段に

向上しており、これらを有効に利活用して、気象業務を改善し、また実りある研究成果を挙げるために、日本の関係者の総力を挙げて取り組む必要がある」ことが強調された。今後、気象学会の中で運営している地球観測衛星連絡会にひまわり8号・9号関連の特別セッションをつくり、ひまわり8号・9号についての情報交換の場とする予定。

委員：地球惑星科学連合において、平成24年に衛星のセッションが設けられる見込み。

委員：JAXAと気象庁については、日本全体としてどういう衛星を打ち上げていくのか、トップレベルで意見交換を行っていただきたい。

委員：気象衛星だけではなく、他の地球観測衛星との複合利用という観点で研究者やコミュニティーに働きかける必要がある。

委員：喫緊の課題ではないが、協力して話を進めていただきたい。

気象庁：気象研究所企画室を窓口として、可能な話から進めさせていただく。

委員：「ラピッド・スキャン」の観測データは気象災害に関する研究に有用と思われるため、実利用向けの研究を進めたい。

委員：災害に関する専門家に「ラピッド・スキャン」の観測データがあるということを周知するところから始めたい。

<気象庁における次期衛星に向けてのプロダクト開発状況>

事務局説明：平成23年度は、気象衛星センターの衛星データ処理システム(スーパーコンピュータ・システム)の更新作業と並行して、「アルゴリズム及び基礎理論に関する資料(ATBD)」を作成するとともに、庁内ユーザーに照会の上で仕様を確定する。平成24年度以降、ATBDの仕様でプログラミング作業を開始する。その際、以下に示す①「衛星風(AMV)」、②「全球大気不安定指数(GII)」、③「火山灰情報」の3つのプロダクトを重点開発プロダクトとして優先的に開発する。

気象庁：ATBDについては、1章が概論、2章がアルゴリズム、3章がユーザー配信、精度評価という構成にし、ドラフト版を準備しているところ。

事務局：英語版のATBDも今後作成する予定。

事務局：次期衛星からの植生等の陸面プロダクトの作成については、気象庁の業務で直接利用しないこともあり検討が遅れているが、次の懇談会において事務局より報告することとする。

委員：植生等の陸面プロダクトについては気象庁のみで開発するのは難しいと考えられるため、JAXAやコミュニティー側からも知恵を出すのが望ましい。

委員：次期衛星においては非常にたくさんのプロダクトの作成が計画されているが、防災での利用等、新たなアイデア等があればお知らせしたい。

委員：低軌道衛星との定常的な比較は気象庁のほうで積極的に行っているのか。

気象庁：現行衛星については輝度温度の比較の結果を気象衛星センターのホームページで公開している。次期衛星についても同様に、搭載放射計の各チャンネル毎の観測精度を常に検証し公開する。

委員：その他の衛星との比較や複合プロダクトについてもドキュメントを作成する必要がある。

気象庁：定常的に行うものについて、先ほどのATBDの精度評価のところに組み込んでいく予定。

<第2回アジア・オセアニア気象衛星利用者会議の日本開催について>

事務局説明：平成23年12月6日から9日に開催される、気象庁主催の第2回アジア・オセアニア気象衛星利用者会議について、概要及びスケジュールを説明。

<その他>

委員：次期衛星はチャンネル数が増大するので、気象庁のみでプロダクト等を開発するのは難しい。リサーチコミュニティのメンバーの意見を反映し、日本の衛星関係者が一体となって研究を進めるべきである。

(3) 今後の予定

事務局説明：次回(第6回)の日程は、3月を予定しているが、改めて調整する。

以上